

〈論文〉

村上春樹『1973年のピンボール』論

——フリッパー、配電盤、ゲーム・テイルト、リプレイ
あるいは、双子の女の子、直子、くしゃみ、『純粹理性批判』の無効性——

小島基洋

家の設計者でもあった最初の住人は年老いた洋画家だったが、彼は直子が越して来る前の冬、肺をこじらせて死んだ。一九六〇年、ボビー・ヴィーが「ラバー・ボール」を唄った年だ。

— 『1973年のピンボール』

You bounce my heart around

And like a rubber ball, I come bouncin' back to you

— "Rubber Ball," Bobby Vee

1. 2009年のピンボール

『1973年のピンボール』¹ (1980) が未だ解説されていないのは、物語の大枠がピンボールという一決してメジャーではないゲームに依拠しているからだだろう。

これはピンボールについての小説である。(28)

序章「ピンボールの誕生について」に記されたこの言葉は、文字通り受け取られなくてはならない。本作はピンボーラーによって書かれたピンボーラーのための小説なのである。

村上はこの小説を執筆した後に、ピンボール台「スペースシップ」を入手し、自らが経

¹ 村上春樹『1973年のピンボール』(講談社文庫 1994年)。引用する際は括弧内に頁数を示す。

営するバーの片隅に置いた。当時のことを彼はこう述懐する。

午前一時のナイトキャップ・ピンボール。電気を消して店を暗くする。窓の外に新宿の高層ビルの灯が見える。あたりはしんとしている。古いサラ・ヴォーンのレコードをかける。グラスにビールを注ぎ、手元に灰皿を置いて煙草に火をつけ……フリープレイのボタンを好きなだけ押し、気の済むまでスシャッ、ゴトゴトゴト、パコ、カンコン・カンコン、ピッピッ、と一人心ゆくまで遊んでいた。S・P・A・C・Eと順番に、ひとつまたひとつ青いランプが灯っていく。よっこらしよ、という感じで渾身の力をこめてフリッパーでボールをひっぱたき、弾きかえす。キックアウトのトライアングルの中を景気良くはねまわったボールが、ごろごろというリアリスティックな音を立ててゆっくりとフリッパーの方に下りてくる。それをフリッパーで受け、さまざまな愛の秘術を尽くしてトラップし、トランスファーし、また弾き返す。それは非常に親密な作業であった。²

ピンボール・プレイの描写としてこれ以上、真に迫るものはない。しかし、そのリアリティーが理解できるかどうか―フィールドを駆けるボールの軌道が目には浮かび、プレイヤーの鼓動が感じられるかどうか―は、偏に読み手のピンボール体験にかかっている。

『1973年のピンボール』を読む際に必要なのは、ピンボールをプレイする時のリアルな身体感覚である。2009年現在、多くの読者はピンボールに触ったことがないか、あるいは、あったとしてもその記憶が薄れてしまっているだろう。最後のピンボール台が博物館のガラス・ケースに収蔵される前に、是非その手でプレイし、然る後に本書を再読していただきたい。その時に初めて、村上がピンボール・プレイヤーだけに送った親密なメッセージを受け取ることができるだろう。³

次章に入る前にピンボール台の基本用語を確認しておこう。随時、参照されたい。各部の名称に付した番号①-⑩は、本文中の [①]-[⑩] と対応している。

² 村上春樹「スペースシップ号の光と影」『村上朝日堂はいほー！』（新潮文庫 1992年）p.172

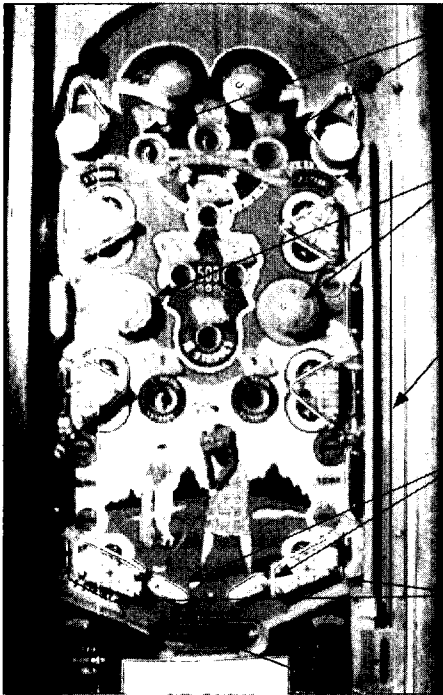
³ 本稿のアイデアの多くは、2008年12月7日夕刻、札幌大学K教授と北18条「おし鳥」にて発見したものである。すすきのNORBESAの三台のピンボール台と、往年の名ピンボール・プレイヤーK先生に、心より感謝の念を捧げたい。

ピンボール台⁴



- ① フィールド (field)
ガラスに覆われたゲームの盤面。
- ② プランジャー (plunger)
手前に引いてボールを弾き出す装置
- ③ 硬貨投入口
- ④ フリッパーボタン (flipper button)
押すとフリッパーが動く。左右に二つ。

フィールド⁵



- ⑤ ホール (hole)
ボールが落ちる、あるいは収まる穴
- ⑥ バンパー (bumper)
ボールが触れると弾き飛ばす円筒形の装置
- ⑦ プランジャー・レーン (plunger lane)
プランジャーに弾かれたボールの通り道
- ⑧ フリッパー (flipper)
プレイヤーが操作してボールを弾く装置
- ⑨ アウト・レーン (out-lane)
アウト・ホールにつながる通り道
- ⑩ アウト・ホール (out-hole)
ここに落ちると1ボール終了

⁴ この写真は Michael Shalhoub, *The Pinball Compendium: Electro-Mechanical Era*, (Schiffer Publishing, 2008), p. 221 をスキャンして、筆者が説明を加えたものである。

⁵ 上掲書 p. 66 より。機種は Williams 社が 1953 年に製造した "Fairway"。

2. フリッパーあるいは双子のトレーナー

「その秋の日曜日の夕暮時に僕の心を捉えたのは実にピンボールだった」(107) —こうして始まった「1973年のピンボール」探索。遂に〈僕〉は幻の名機「スペースシップ」に辿りつく。

やあ、と僕は言った。……いや、言わなかったのかもしれない。とにかく僕は彼女のフィールドのガラス板に手を載せた。ガラスは氷のように冷ややかであり、僕の手の間は白くもった十本の指のあとをそこに残した。彼女はやっと目覚めたように僕に微笑む。

ずいぶん長く会わなかったような気がするわ、と彼女が言う。僕は考えるふりをして指を折ってみる。三年ってとこだな。あつという間だよ。(155-156)

このピンボール台が〈僕〉の死んだ恋人、直子であることは多くの議論の前提として共有されてきた⁶。〈僕〉が再会したスペースシップは単なるピンボール台ではなく、「人間ピンボール台」—直子の精神を宿したピンボール台—なのである。

しかし、本作の企みはそのレベルに留まっではない。村上は「人間ピンボール台」のほかに、「ピンボール台人間」—ピンボール台として存在する人間—を登場させているのだ。このことを最初に指摘したのが斎藤美奈子である。

ふた子の女の子が二枚のフリッパー。「僕」がボール。そのように見立てて物語を台と見なすと、ボールがガチャガチャとぶつかりながら得点が加算されていくあのゲームに、この小説の構造はよく似ている⁷。

斎藤はその詳細についてこれ以上の説明をしていないが、双子を左右のフリッパー [⑧] として解釈する読み筋は決定的である(〈僕〉をボール、物語を台、と見なすことには議

⁶ 「スペースシップ」を直子だと見なして説明している論者は、たとえば、加藤典洋『村上春樹イエローページ作品別 1979-96』(荒地出版社 1996年) p. 48、山根由美恵『村上春樹『1973年のピンボール』論：臚化された三角関係』『近代文学試論』(広島大学近代文学研究会 2001年) p. 48、石原千秋『謎解き村上春樹』(光文社新書 2007年) p. 159など。本論もこの立場を議論の出発点とし、更にそれを補強すべく論証を重ねていく。

論の余地があるが…。本論は、斎藤の着想⁸—フリッパーとしての双子—を実証することから出発し、新たに『1973年のピンボール』とピンボール・ゲームの関わりを解明していく。

ある朝、目を覚ますと「僕の両肩に鼻先をつけて」（12）双子の女の子が寝ている。こうして〈僕〉と双子の同棲生活が始まる。双子は外見では全く見分けがつかず、「ある種の刺激に対する反応の具合も同じ」（30）である。双子がピンボール台のフリッパーだとすると、次のくだりなどもよく理解できる。

「もしどうしても名前が欲しいのなら、適当につけてくれればいいわ。」ともう一人が提案した。

「あなたの好きなように呼べばいい。」

彼女たちはいつも交互にしゃべった。まるでFM放送のステレオ・チェックみたいな。おかげで頭は余計に痛んだ。

「たとえば？」

「右と左。」と一人が言った。

「縦と横。」ともう一人が言った。

「上と下。」

「表と裏。」

「東と西。」

「入口と出口。」僕は負けないように辛うじてそう付け加えた。二人は顔を見合わせて満足そうに笑った。（下線部筆者：13-14）⁹

⁷ 斎藤美奈子「『村上春樹』クエスト」『文学界』（1996年8月号）p. 170。この論は加筆訂正の後、『文壇アイドル論』（岩波書店 2001年）に収録される。「双子＝フリッパー」説に言及する論は他に一例ある。前田ふさえが以下のように述べる。「ボール球の最終的な生死を運命づけるもの、それは最下部の左右対称に置かれたフリッパーである。このフリッパーとボールの関係は、まるで〈僕〉と双子の女の子たちの関係をみるようでもある。時に寛大に〈僕〉を助け、時にあっさり突き放す。」前田ふさえ「村上春樹『1973年のピンボール』論—双子を中心に—」『国文学論叢』（龍谷大学国文学出版部 2000年）p. 105。

⁸ 斎藤は、マッキントッシュ版のピンボールゲーム（トリスタン）をプレイしていてこの読み筋を「発見」したのだと告白している。『文壇アイドル論』（岩波書店 2001年）p. 20

⁹ 初出時（『群像』1980年3月号）には、これ以外にも「トムとジェリー」「バットマンとロビン」など非対称なものも含まれていた。山崎真紀子『村上春樹の本文改稿研究』（若草書房 2008年）p. 85-86 参照。

双子が「満足そうに」笑う理由—それは「入口と出口」というのが、彼女たちもその一部をなすピンボール台の属性だったからである。プランジャー・レーン [⑦] —「入口」—からフィールド [④] 内に弾き出されたボールは、二枚のフリッパー [⑧] で幾度弾かれようとも、最終的にはその間をすり抜けてアウト・ホール [⑩] —「出口」—からキャビネットの下層に落ちていくことになる。やがて底に溜まったボールは、再びプランジャー・レーンからフィールドに送り込まれる。このようなピンボール台の構造が分かれば、〈僕〉と双子が近所のゴルフ場で「ロスト・ボールを捜し」(38) ている理由も明らかだろう。

〈僕〉は双子を区別する際に、二人の衣服で区別をする。彼女たちは、胸の部分に「シリアル・ナンバー製造番号みたい」(35) な 208 と 209 という数字¹⁰ がプリントされているトレーナーを着ているのだ。このトレーナーは、双子と〈僕〉の幸せな共同生活を描写する際に重要な役割を果たしている。

僕が仕事から戻ってくると、南向きの窓に 208, 209 という番号のついたトレーナー・シャツがはためいているのによく出会った。そんな折には涙さえ出たものだ。

(下線部筆者：37-38)

情緒的な美しい文章に、巧妙に隠されたピンボール・モチーフ「窓」(盤を覆うプレイフィールド・グラス) と「はためいている」「トレーナー・シャツ」(パタパタと動くフリッパー)。彼らの至福の瞬間にも密かにピンボール台が顕現しているのだ。

それにしても、この不思議な双子はどこから来たのだろうか。

3. 直子の街でピンボール

〈僕〉の前に現れた双子。彼女たちは、〈僕〉の「ピンボール幻想」—世界をピンボールとして捉える傾向—の究極の形だと言えるだろう。周囲にピンボール台の類似物を見出し

¹⁰ リチャード・ブローティガン『アメリカの鱈釣り』には「〈アメリカの鱈釣りホテル〉二〇八号室」という章がある。語り手は「二〇八」という名前の猫を飼うカップルが暮らすホテルを訪ねる。「わたしは猫(二〇八)は、二人の部屋番号をとって名づけられたのだと考えたかった。ところが、部屋番号は三〇〇台だとわかっていた。なぜかといえば、部屋は三階にあったから。」(新潮文庫 2005 年) p. 133。おそらく、この猫が 208 という名前をもつ双子のソースであり、ここで語り手の頭の中に概念的に存在する 208 号室が、『ねじまき鳥クロニクル』で主人公の妻クミコが幽閉されている空想的な部屋—208 号室—の下敷きであると思われる。

ていくうちに、ピンボール台のパーツが人格をもって現れたのだ。

では何故〈僕〉は「ピンボール幻想」などといったものに捕らわれていったのだろうか。その起源を探して時系列を遡ると、まずは3年前の1970年に行き当たる。この冬、〈僕〉は「ピンボールの呪術の世界」(113)にはまりこむ。かつて地元のジェイズバーにおいてあったピンボール台「スペースシップ」をゲーム・センターで見つけ出して通い詰めるのである。そこで〈僕〉と「スペースシップ」は唐突に言葉を交わす。

あなたのせいじゃない、と彼女は言った。そして何度も首を振った。あなたは悪くなんかないのよ、精一杯やったじゃない。

違う、と僕は言う。左のフリッパー、タップ・トランスファー、九番ターゲット。違うんだ。僕は何ひとつ出来なかった。指一本動かせなかった。でも、やろうと思えばできたんだ。

人にできることはとてもかぎられたことなのよ、と彼女は言う。

そうかもしれない、と僕は言う。でも何ひとつ終っちゃいない、いつまでもずっと同じなんだ。リターン・レーン、トラップ、キックアウト・ホール、リバウンド、ハギング、六番ターゲット……ボーナス・ライト。121150、終わったのよ、何もかも、と彼女は言う。(115)

この時、〈僕〉の目の前にあるピンボール台に憑依しているのは、数ヶ月前に死んだ直子だと考えられる。

直子は何故〈僕〉の前に現れることになったのか。更に遡ること1年半、1969年の春のことである。新学期を迎えたキャンパスで、直子は〈僕〉に生まれ故郷の街について語り、最後にこう付け加える。

「おそろしく退屈な街よ。いったいどんな目的であれほど退屈な街ができたのか想像もつかないわ。」

「神は様々な形にその姿を現わされる。」僕はそう言ってみた。

直子は首を振って一人で笑った。成績表にずらりとAを並べた女子学生がよくやる笑い方だったが、それは奇妙に長い間僕の心に残った。まるで「不思議の国のアリス」に出てくるチェシャ猫のように、彼女が消えた後もその笑いだけが残っていた。

(10)

「神は様々な形にその姿を現わされる」—〈僕〉はこの言葉に誘われた直子の笑いを忘れることができない。これが〈僕〉の「ピンボール幻想」の根本にあるのだろう。直子を失った〈僕〉は、彼女が再び自分の前に「姿を現す」のを切望するあまり、当時、熱中したピンボール・マシーン「スペースシップ」に彼女の姿を見出してしまったのだ。

ただ、〈僕〉が何故、他でもなくピンボール台に直子を見出したのかという問いは残る。両者を結びつけたきっかけはこういうことかもしれない—〈僕〉は直子の故郷の話聞きながらピンボール台を思い浮かべていたのだ。直子の街の様子はこんな感じである。

「プラットフォームの端から端まで犬がいつも散歩しているのよ。そんな駅。わかるでしょ？」

僕は肯いた。

「駅を出ると小さなロータリーがあって、バスの停留所があるの。そして店が何軒か。……寝呆けたような店よ。そこをまっすぐに行くと公園にぶつかるわ。公園にはすべり台がひとつとブランコが三台。」

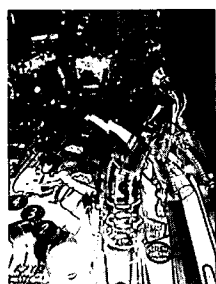
「砂場は？」

「砂場？」彼女はゆっくりと考えてから確認するように肯いた。「あるわ。」(9-10)

〈僕〉は、駅をプランジャー・レーン [⑦] に、すべり台をランプ・レーン¹¹ に、ブランコをバンパー [⑥] に、そして砂場をホール [⑤] に見立てていたのだ……などと読むのは、さすがに空想的に過ぎるだろうか。1頁以上にわたって詳述される直子の街の井戸掘り職人のエピソード (17-18) から、街の井戸にピンボールの硬貨投入口 [③] を読んだとしたら、過剰解釈の謗りを免れえないだろうか。たとえ次のような文章を考慮にいらしたとしても—「僕は井戸が好きだ。井戸を見るたびに、石を放り込んでみる。小石が深い井戸の水面を打つ音ほど心安まるものはない」(18)。

しかし、ここで〈僕〉が直子の街の様子にピンボール台を幻視していたことは、やはり

¹¹ ランプ・レーン (ramp lane) とは、比較的后期になって現れた複層構造をもつピンボール台の装置である。ボールを上層から下層、あるいは下層から上層に移動させる湾曲したレーンである。滑り台、あるいはエスカレーターにも似ている。以下の写真では針金の部分。



間違いないだろう。この会話から4年の後、1973年の5月に〈僕〉が直子の街を訪れた時のことである。来訪の目的は「プラットフォームを縦断する犬にどうしても会いたかった」(10) からだとされるのだが、〈僕〉はそこで犬を使って仮想ピンボールをプレイしているのだ。

「入れよ。」と僕は後に下がって犬を呼んだ。犬はためらうように後を振り向き、よくわからぬままに尻尾を振り続けた。

「中に入れよ。待ちくたびれたんだ。」

僕はポケットからチューインガムを取り出し、包装紙を取って犬に見せた。犬はしばらくガムをじっと眺めてから、決心し柵をくぐった。僕は犬の頭を何度か撫でてから手のひらでガムを丸め、プラットフォームの端に向かって思い切り放り投げた。犬は一直線に走った。

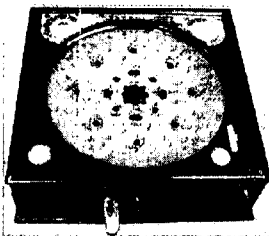
僕は満足して家に帰った。(下線部筆者：22)

犬(ピンボール球)をプラットフォーム(プランジャー・レーン [⑦])の脇から入れ、「一直線に」走らせる(弾き出す)。直子の街でピンボールを再現し¹²、おそらく、そこに彼女を見出した〈僕〉は「満足して」家に帰るのだ。

しかし、それは一時的な「満足」に過ぎない。ピンボール台が永遠のリプレイを要求するように、直子との仮想的再会もこれで終わりだというポイントがやってくることはない。先程の続きを引用する。

帰りの電車の中で何度も自分に言いきかせた。全ては終っちまったんだ、もう忘れろ、と。そのためにここまで来たんじゃないか、と。でも忘れることなんてできなか

¹² 直子の街には池があるのだが、その池に釣り人が垂れた糸が「水面につきささった銀の針のようにピクリとも動かなかった」(22)という描写がある。釘の間をボールが転がっていた初期のピンボールを思わせる光景である。以下はRay Moloneyが1932年に製作した“Barry Round”。Michael Shalhoub, *The Pinball Compendium: Electro-Mechanical Era*, (Schiffer Publishing, 2008), p. 8より。



った。直子を愛していたことも、そして彼女がもう死んでしまったことも。結局のところ何ひとつ終ってはいなかったからだ。(23)

〈僕〉は双子の待つアパートに戻る。直子の死後、「スペースシップ」に彼女を見出した〈僕〉は、やがて、訪れた直子の街をはじめ、多くのものにピンボール・マシーン—直子の化身—を見出していく¹³。その最終形がフリッパーを体現して目の前に現れる双子なのだ。

4. 配電盤あるいは直子の死

やがて〈僕〉と双子の共同生活に不協和音が響き始める。そのきっかけは、配電盤の交換人の訪問である。〈僕〉は決して交換に賛成ではないが（「旧式で構わないよ。」(46)¹⁴）、結局、配電盤は取り替えられる。作業員が帰ると、双子は彼が忘れていった古い配電盤で遊び出し、その傍らで〈僕〉は仕事を始める。

僕は二人には取り合わず、午後の間ずっと持ち帰りの翻訳の仕事が続けた。……調子は悪くなかったが、三時をこえたあたりから電池が切れかけたようにペースが落ちはじめ、四時には全てが死に絶えた。もう一行も進まなかった。

僕はあきらめて机に敷いたガラス板の上に両肘をつき、天井に向けて煙草をふかした。(下線部筆者：51)

¹³ ピンボールのイメージは各所に登場する。たとえば作品冒頭—学生時代の〈僕〉に故郷の話を語る人々について。「……それは僕に、段ボール箱にぎっしりと詰め込まれた猿の群れを思わせた。僕はそういった猿たちを一匹ずつ箱から取り出しては丁寧にほこりを払い、尻をパンと叩いて草原に放してやった」(6)。彼らに対して〈僕〉は「三百種類ばかりの実に様々な相槌」をもって応じたのだと述懐する。

あるいは、〈僕〉の下宿先での電話の取次ぎ。一階に住む〈僕〉は電話がかかってくると二階に住む少女を呼びに行く。「彼女の部屋をノックして電話ですよ、と叫ぶと、少し間をおいてどうも、と彼女が言った。どうも、という以外の言葉を聞いたことがない」(60)。彼女と乗ったタクシーのラジオは「はね上げ式の方向指示器」くらい古くさい歌を流し、電車が動き出すと彼女は「窓から手を」振る(65)。

また、喫茶店の「ガラス窓」(76) 越しに見る「何人かの小学生がゴムボールをポンポンと」(75-76) つく光景。

あるいは、「ショーケースのガラスの一センチほどの隙間から小指の先をさしこむと」「競ってジャンプし、僕の指に噛み」つく「二匹の猫」(100) など。

¹⁴ このやり取りは、「スペースシップ」探索時のゲーム・センター主人との会話を彷彿とさせる。「4フリッパーの地底探検」「3フリッパーのサウスポー」といった新しい機械を勧める主人に対し、〈僕〉は「スペースシップにしか興味がないんだ」(121) と頑なである。

〈僕〉の翻訳の仕事—あるいは仮想ピンボール・プレイ（「電池」「ガラス板」）—のペースが落ちたのは、配電盤を取り替えたせいだと何故か双子は考えている。

「上手くいかないの？」と209が訊ねた。

「らしいね。」と僕は言った。

「弱ってるのよ。」208。

「何が？」

「配電盤よ。」(52)

双子は配電盤に詳しいようだ。「押入れの奥よ。板をはがすの」(49) —在り処まで知っており〈僕〉を驚かせる。その位置からして、配電盤は、ピンボール台のフィールド下部にある電気系統なのだろう¹⁵。双子がフリッパーだったとしたら知っていても不思議はない。そしておそらく彼女たちは古い配電盤が〈僕〉にとって何を意味しているのかも知っているのだ。一方、調子が出ない〈僕〉は、「日曜だからロスト・ボールも多いかもしれない」(53) という予測のもとに、双子とゴルフ場に散歩に行くが、ボールはひとつも見つからない。新しい配電盤では「ピンボール幻想」がうまく機能しないことに〈僕〉はまだ気づいていない。

配電盤が新型に交換されて以降、双子の行動は少しずつ〈僕〉の理解を超えるようになっていく。彼女たちは新しい行動原理で動き始めるのだ。ある日会社から帰宅すると双子はビートルズの「ラバー・ソウル」(ゴムの魂?)¹⁶ をかける(78-79)。これに〈僕〉は驚き(「こんなレコード買った覚えがないぜ」)、双子は謝る(「残念ね。喜んでくれると思った

¹⁵ 以下の写真は、実在する「スペースシップ」のフィールド下層を写したものの。



<http://www.ipdb.org/showpic.pl?id=2259&picno=2153>

¹⁶ フリッパーの表面はゴムで覆われていることを考えると、『ラバー・ソウル』(「ゴムの魂」)というLPは、“心”をもった“フリッパー”である双子のテーマ音楽として実にふさわしい。なお、双子と『ラバー・ソウル』の接点についてはいくつか議論がある。前田ふさえはリチャード・ブローティガン『愛のゆくえ』に登場する女の子も主人公に『ラバー・ソウル』を聴かせていることを指摘する。前掲書 p. 105-106。また野松は、『ノルウェイの森』(1987)の直子が好きだった曲が『ラバー・ソウル』に収録されていることを指摘する。野松循子「村上春樹 音楽が語る『1973年のピンボール』の世界」『菘女子短期大学研究紀要』(1998年12月) p. 29-31。

の)「ごめんなさい)。また別の日、〈僕〉が帰宅すると、双子が家にいない(83-85)。ゴルフ場(フィールド [①])に遊びに行くという書置きが見つかる。〈僕〉は「露天のエスカレーター」(ランプ・レーン¹⁷⁾)のところで双子を発見し、勝手に遊びに出たこと、「バンカー」(ホール [⑤])にゴミを捨てたことを諫める(「砂場に何か残しちゃいけない)。二人は謝る(「ごめんなさい)。

その夜、〈僕〉は、古い配電盤が「死にかけている」(86)ことを気に病み、双子に相談を持ちかける。

僕はため息をついた。「死なせたくない。」

「気持ちはわかるわ。」と一人が言った。「でもきっと、あなたには荷が重すぎたのよ。」

それはまるで今年の冬は雪が少ないからスキーはあきらめなさい、とでも言う時のようなあっさりとした言い方だった。(87)

古い配電盤は、双子が特に思い入れをもたない一方で、〈僕〉がその死を惜しみ、そしてその死に対して責任をもつもの一つまり直子一だったのである¹⁸。

そんな〈僕〉を見かねた双子は、想いを断ち切らせるためか、配電盤の「お葬式」をすることを要求する。次の日曜に、三人は車で「貯水池」に向かう。「さあ、そろそろ済まなきゃね」(98) —双子のひとりに促された〈僕〉は貯水池の水際に立つ。双子は紙袋から配電盤を出すと、葬儀に際して「お祈りの文句」を言うよう〈僕〉に求める。

僕は頭から爪先までぐっしょり雨に濡れながら適当な文句を捜した。双子は心配そうに僕と配電盤を交互に眺めた。

「哲学の義務は、」と僕はカントを引用した。「誤解によって生じた幻想を除去することにある。……配電盤よ貯水池の底に安らかに眠れ。」

¹⁷ 「露天のエスカレーター」などというものが、果たしてゴルフ場にあるのだろうか。これもランプ・レーンを示唆していると考えれば合点がいく。ランプ・レーンに関しては注の11を参照のこと。

¹⁸ 従来、「配電盤とは何か」という問いに対しては(「双子とは何か」という問いと同様)、直接的な答えを提示するのではなく、それが果たす機能に焦点を当てて説明される傾向がある。たとえば中村三春は、配電盤を「言語的な絆の円環性を表す機械」だとし、双子を「発語とコミュニケーションにまつわる損傷を受けた〈僕〉の現実世界における治癒の補助者となるような巫女的な存在」だとする。中村三春『「風の歌を聴け」【1973年のピンボール】【羊をめぐる冒険】【ダンス・ダンス・ダンス】四部作の世界』【国文学 解釈と教材の研究】(学灯社 1995年3月) p. 70-73

「投げて。」

「ん？」

「配電盤よ。」

僕は右腕を思い切りバック・スイングさせてから、配電盤を四十五度の角度で一杯放り投げた。配電盤は雨の中を見事な弧を描いて飛び、水面を打った。そして波紋がゆっくりと広がり、僕たちの足もとにまでやってきた。

「素晴らしいお祈りだったわ。」（下線部筆者：99）

〈僕〉はお祈りの言葉として愛読するカントの『純粹理性批判』序文を引く¹⁹。「誤解によって生じた幻想を除去する」とは、〈僕〉の「幻想」—古い配電盤に直子を見てしまうような「誤解」—を放棄することに他ならない。双子はこれを「素晴らしいお祈り」だと褒める。しかし皮肉なことに、双子主導で行われた葬送の儀式はピンボール・ゲームの様相を呈している。〈僕〉は「思い切りバック・スイング」して（フル・プランジャー・ショット²⁰）、配電盤を「貯水池」(アウト・ホール[⑩])に投げ入れるのだ。ゲーム、終了……。

しかし、配電盤（直子）の葬儀を行ったとしても、〈僕〉の「ピンボール幻想」は除去されはしない。むしろ、失われた「スペースシップ」—直子—を探索する方向に〈僕〉を駆り立てて行く。プレイ再開だ。ピンボール・マニアのスペイン語講師と知り合った〈僕〉は、彼と二人でピンボール収集家の倉庫に向かう。

……僕は無意識に指先で膝をパタパタと叩き続けた。そして時折タクシーのドアを押しあけて逃げ出してしまう衝動に駆られた。

配電盤、砂場、貯水池、ゴルフ・コース、セーターの綻び、そしてピンボール……どこまで行けばいいのだろうと思う。脈絡のないばらばらのカードを抱えたまま僕は途方に暮れていた。たまらなく部屋に帰りたい。一刻も早く風呂に入り、ビールを飲み、煙草とカントを持って暖かいベッドに潜り込みたかった。（下線部筆者：146）

配電盤（電気系統）、砂場（ホール [⑤]）²¹、貯水池（アウト・ホール [⑩]）、ゴルフ・コ

¹⁹ 「哲学の義務は、誤解から生じたまやかしを除くにあった。たとえその際、いたく賞讃され愛着されている虚妄が破滅しようとも、それは私の意とするところではなかった。」カント『純粹理性批判』上 篠田英雄訳（岩波文庫 1961年）p. 17

²⁰ プランジャー [②] を目一杯手前に引っ張って打ち出すショット。

²¹ 〈僕〉は直子の街の公園に「砂場」があるかどうかを気にしている（10）。また双子がゴルフ・コースのバンカーにゴミを捨てた時、「砂場に何かを残しちゃいけない」（85）と言って咎める。ゴルフ・ボール

ース（フィールド [①]）、セーターの綻び（フリッパー・リンクの故障²²）—さまざまな「ピンボール幻想」を、カントの力で「除去」したいと願いながらも、〈僕〉は78台のピンボール台が収められた養鶏場の倉庫にたどり着く。そこで遂に「スペースシップ」（直子）との再会を果たし、親密な言葉を交わすことになるのだ。—君のことはよく考えるよ……眠れない夜に？……そう、眠れない夜に。（156）『純粹理性批判』はその効力を發揮しない。

5. ゲーム・ティルト,あるいは〈僕〉のくしゃみ

この物語は「何もかもがすきとおってしまいそうなほどの十一月の静かな日曜日」（175）に、〈僕〉のもとを双子が去る場面で終る。そのきっかけはこんな事件である。

ある日双子はスーパー・マーケットで一箱の綿棒を買った。その箱には三百本の綿棒がつめこまれていた。僕が風呂から上がるたびに双子は僕の両脇に座って両側の耳を同時に掃除した。二人は確かに耳の掃除が上手かった。僕は目を閉じてビールを飲みながら、二本の綿棒が立てるコンコンという音を耳の中に聞き続けた。ところがある夜、僕は耳掃除の最中にくしゃみをした。そしてその瞬間に両方の耳が殆んど聞こえなくなってしまった。（169）

両側から耳掃除をする双子の綿棒は、パタパタと動く左右のフリッパーであることは明らかである。だが、〈僕〉のくしゃみは何を意味するのだろうか。おそらくこれはゲーム・ティルトのことだ。ピンボール台にはティルトという機構が備わっている。プレイヤーがボールの動きを変えるために台そのものに衝撃を与えたり、傾けたりする行為を感知する部位である。これに関しては本作の序章「ピンボールの誕生について」でも「強い揺さぶり

がバンカーに嵌り込んでしまうことを考えると、砂場というのは、ピンボールでいうところの「ホール [⑥]」なのかもしれない。ちなみに本作に登場するスペースシップでは土星が「キック・アウト・ホール」（そこに嵌ると、一定期間ボールが止められ急に弾き出されるホール）になっている（155）。小説冒頭には土星生まれだと語る男が登場し、土星は「引力がとても強い」（7）と話している。砂場—バンカー—（キック・アウト）ホール—土星、のイメージが連鎖しているのかもしれない。

²² 〈僕〉が勤務している翻訳事務所の「女の子」は〈僕〉の「セーターの綻び」をいつも気にしている。彼女は〈僕〉のセーターから猫の毛を取っている時に「わきが綻びてる」（101）ことに気づく。また、〈僕〉がスペースシップをプレイしに行く時にも、〈僕〉に両手を上げさせて「わきの下をじっと点検」（141）する。セーターの脇の綻びとは、何なのだろう。一對の袖が形状的に左右のフリッパーに当たるとすると、脇の部分はフリッパーの軸とフリッパー・コイルをつなぐフリッパー・リンクにあたるだろうか。

に対しては反則ランプが」(27) 点灯すると述べられている。ちなみに序章は次の言葉で締めくくられている。

ピンボールの目的は自己表現にあるのではなく、自己変革にある。エゴの拡大ではなく、縮小にある。分析にではなく、包括にある。

もしあなたが自己表現やエゴの拡大や分析を目指せば、あなたは反則ランプによって容赦なき報復を受けるだろう。

ハズ・ア・ナイス・ゲーム
良きゲームを祈る。(29)

〈僕〉は自らの「ピンボール幻想」の中で意図せずして反則を犯したのだ。あとは「容赦なき報復」—ゲーム終了—を待つのみである。

双子と近所の救急病院²³に行った帰り道に〈僕〉が抱く感慨には、双子との別れも近いことが暗示されている。

僕たちは十五分も遠回りしてゴルフ場を横切ってアパートに帰った。十一番ホールのドッグ・レッグは耳の穴を思い出させ、フラッグは綿棒を思い出させた。もっとある。月にかかった雲はB52の編隊を連想させたし、こんもりと繁った西の林は魚の形をした文鎮を連想させたし、空の星はかびがはえたパセリの粉を連想させたし……、もうよそう。とにかく耳はすばらしく鋭敏に世界中の物音を聞き分けていた。まるで世界が一枚のヴェールを脱ぎ捨てたように感じられた。何キロでも遠くで夜の鳥が鳴き、何キロも遠くで人々は窓を閉め、何キロも遠くで人々は愛を語っていた。

「よかったわね。」と一人が言った。

「本当によかった。」ともう一人が言った。(下線部筆者：172)

〈僕〉はメタファーをいくつも思い浮かべた上で、「もうよそう」と思う。類似物を介した世界認識を放棄し、世界そのものを直接感じようとする。それは双子を含む「ピンボール幻想」—世界をピンボール台として認識する—を放棄することでもある。たとえばこんな風に。—双子の女の子はフリッパーを思わせた……もうよそう。

突き抜けるような青い空の日曜日、双子は〈僕〉のもとから去ることになる。作品の最

²³ 〈僕〉の耳の治療は少々奇妙である。「注射器は僕の耳にさしこまれ、あめ色の液は耳の穴中をしまうまのようにとびはねたあとで耳からあふれてメガフォンの中に落ちた」(171)。ピンボール台の修理を思わせる。

終頁を引用する。

僕たちはゴルフ場の金網を越えて林を抜け、バス停のベンチに座ってバスを待った。日曜日の朝の停留所はすばらしく静かで、おだやかな日差しに満ちていた。僕たちはその光の中でしりとりをつづきをした。五分ばかりでバスが来ると僕は二人にバスの料金を与えた。

「またどこかで会おう。」と僕は言った。

「またどこかで。」と一人が言った。

「またどこかでね。」ともう一人が言った。

それはまるでこだまのように僕の心でしばらくのあいだ響いていた。

バスのドアがパタンと閉まり、双子が窓から手を振った。何もかもが繰り返される……。僕は一人同じ道に戻り、秋の光が溢れる部屋の中で双子の残していった「ラバー・ソウル」を聴き、コーヒーを立てた。そして一日、窓の外を通り過ぎていく十一月の日曜日を眺めた。何もかもがすきとおってしまいそうなほどの十一月の静かな日曜日だった。(下線部筆者：175)

一体、ここで何が「繰り返され」ているのだろうか……。もうお分かりだろう。「バスの料金を渡し(コインを入れ)、「窓」(フィールド・グラス)の向こうで双子(フリッパー)が手を振る(パタパタと動く)―再び「ピンボール幻想」が「繰り返され」ているのだ²⁴。

ピンボールの無限性について、序章「ピンボールの誕生について」ではこう語られている。

しかしピンボール・マシンはあなたを何処にも連れて行きはしない。リプレイ(再試合)のランプを灯すだけだ。リプレイ、リプレイ、リプレイ……。まるでピン

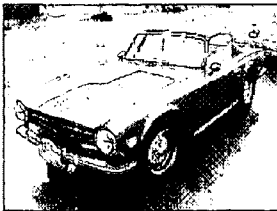
²⁴ 〈僕〉と双子の後日談が短編「双子と沈んだ大陸」である。「双子とわかれて半年ほど経った頃」、雑誌を読んでいた〈僕〉は双子の写真を発見する。彼女たちは「何もかもがガラスで作られている」六本木のディスコ「ザ・グラス・ケージ」(The Glass Cage)で酒を飲んでた。〈僕〉は不思議な夢を見る。おしゃべりに夢中になる双子が壁に塗りこめられつつあるのだ。〈僕〉は何とかなして彼女たちに危険を知らせようとするものの、厚いガラスがそれを阻む。「……結末はいつも同じなんだ。そこにはガラスの壁があって、僕には誰かに何かを伝えることができない」。双子と〈僕〉の間にあるガラスは、フリッパーとプレイヤーを隔てるフィールド・グラスを思わせる。「双子と沈んだ大陸」【バン屋再襲撃】(文春文庫 1994年) p.123-54

ボール・ゲームそのものがある永劫性を目指しているようにさえ思える。(29)

〈僕〉の「ピンボール幻想」には果たして終わりがあるのだろうか。それはこんな問いに置き換えられる—〈僕〉は直子への思いを断ち切ることができるのだろうか。その答えが否定的なものだろうという漠たる予感を残して『1973年のピンボール』は閉じる²⁵。

これ以降の村上の作品を見ても、答えは否である。本作から7年後に出版された『ノルウェイの森』(1987)は、奇しくも『ラバー・ソウル』の一曲「ノルウェイの森」を聞いて直子を思い出し、深く混乱する37歳の主人公の姿と共に幕を開けるのである。

²⁵ 本論では意図的に触れなかったが、この物語にはもう一人の主人公がいる。「これは『僕』の話であるとともに鼠と呼ばれる男の話である」(25)。友人・鼠の運命は〈僕〉がかつて鼠取りで捕獲した一匹の鼠が暗示している。〈僕〉は罫にかかって動けなくなっている鼠を見てこんなことを思う。「物事には必ず入口と出口がなくてはならない」(15)。1973年、〈僕〉と700キロ離れた街で暮らす友人・鼠は、恋人と別れて街を出る決意をする。最終場面では、鼠は一人夜の霊園に車〈トライアンフ〉を止めて暗闇を見つめている。この時、不意に「出口」のなくなったピンボール台のイメージが現われる。「車の屋根に落ちた葉は小さな乾いた音を立て、しばらく屋根の上を彷徨ってからフロント・ガラスの傾斜をつたってフェンダーに積もった」(166)。落ち葉(ボール)はフロント・ガラスの傾斜をつたいフェンダー(アウト・レーン [⑨])に積もる(たまる)。「鼠は前かがみになって両手をステアリングに乗せたまま身動き一つ」(166)しない。やがて鼠はステアリング(フリッパーボタン [④])から「両手を離し」(167)、行き先を探すべくロードマップをめくるが、猛烈な睡魔に襲われ眠りに落ちる。あるいは、彼も「出口」を見出せないのかもしれない。



—トライアンフ TR6—

http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/e/e1/Triumph_TR6_Triumph_Rijders.jpg